

ふる里の歳時記 (118)

写真と文：厚川 小一（エッセイスト）



秋高し

ばてれんは吾が祖の地なり秋海棠 しゅうかいどう 厚川小一

対象であったので、このような美しい話が生まれたのであろう。

月天心貧しき町を通りけり 蕪村

俳句の講座に入門すると、決まってこの句が挙げられる。昔から商店街が並ぶ街道は多くそれを何々銀座と俗に呼んでいた。決して華やかではなかったが、現在篠塚に一か所だけ夜を明るくして食べもの店が集中している。食べるものがある所には人が集まるといわれているが、広い国道を擁むように並んでいる。

このごろ町並みを走ってみて、「貧しき町」の感が胸に迫る旧道が多くなってきた。まだ屋号を覚えている老舗も、そのまま残っているが、シャッターを下ろして久しい。月をてつぺんにした蕪村の句は、古い時代に当たるが、「貧しき町」の表現が再び通じるようになったのは時代の波というしかない。私たちの胸の奥に潜む原風景である。

三日月がめそめそといる米の飯

金子兜太 講談社版大歳時記

俳人は、秋の美しい月が光り出すと、三日月から入り込めぬが、万葉時代すでに大伴家持が詠んでいる。農耕上の重要な折目である十五夜の月は、崇拜の対象であったが仏教伝来と共に信仰上の意味を深めるようになってきた。十五夜の月は、名月と呼ぶようになり、つい近年まで芒を飾っていたが、この風習は東北の西寄りの地を除いておおかたは廃れてしまった。

名月や畳の上に松の影

其角

こんな時代は私の子どもころはまだ残っていたが、今ではピカピカなテレビに一家の目は集まり、改めて月を鑑賞する人は稀である。「月とスポン」という俗語が残っている。それは私のような人生の底辺を歩いてきた者を指してであるが、この辺で返上しておきたい。

この10月号を書いたのは、8月31日の午後であるが、廊下の温度計は34.7度を指している。この猛暑の中、2か月で私の体重が2.4キロ減った。それでも何とか耐えて来られたのは天運のような気がする。

暮れ六つやまだ見えてゐる稲の花

厚川小一

早朝の散歩で新しくできた孫兵衛川の新橋を初めて渡り、田んぼ道をめぐってきたが稲の穂が出そろった田もあり、花盛りの田もあった。水利がよくなったので水不足もなく、平年を上回るように見える。天気図に南方はるかに台風の目が三つ並んでいるが、二百十日の荒れは外れそうである。

大型版の俳句歳時記で、「月」の項を開くと秀句が百句以上並べられている。現在では、俳人がやや高齢化してきたが、年間を通して百万句に達すると聞く。月は四季を通じ取り込むことができることから天文の項に必ず入っている。しかし、それは季語としてうまく挟み込んだものが大半を占め、畳

の上に松の影というような、実際に写生したものは極めて少ないように見える。そんなことから「俳諧師見てきたような嘘をつき」と頭を抑えられることもあるのである。俳句手帳をポケットに吟行に出るのが俳人の本来の姿であったが、今や机上吟詠に移ってきた。それも高齢化と共に自身の足元を見つめた「自己批判句」が多くなってきた。当然の成り行きではあるが。

ひとりごと From editors

▼今回の街角特派員レポートは、松本古墳をテーマに取り上げました。街角特派員の岩松さんと一緒に取材に出掛けたり、町の重要文化財を見たりと、取材を通して貴重な体験をすることができました。また、取材では文化財保護調査委員の大塚さんを始め、多くの人たちに大変お世話になりました。本当にありがとうございました。▼悠久のときを経て、松本古墳から出土した銀象嵌大刀は、町指定の重要文化財。古墳時代の時代背景などを知るとても貴重な手掛かりです。自分の身近に、そんな歴史的価値のある文化財があることを、改めて知ることができました。まずは知ること、これが一番大切ですね。(小)



稲穂豊かな田園 (篠塚坪谷)



Photo 広報担当者



広報おうら

ORA TOWN Public Relations

平成22年10月号 No.529

毎月1日発行

編集・発行 邑楽町役場企画課

〒370-0692 (住所記入不要)

☎0276-88-5511 (代表)

☎0276-47-5007 (企画課直通)

☎0276-89-0136

URL <http://www.town.ora.gunma.jp>

E-mail koho@town.ora.gunma.jp

邑楽町携帯サイト

2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。

携帯用URL <http://www.town.ora.gunma.jp/k>

